

西行歌享受の側面

—『新古今和歌集』神祇部における西行歌の位置—

中西 満 義

はじめに

西行の没後十余年を経て成立をみた『新古今和歌集』には、入集歌数としては最多の九十四首の西行歌を収めている。この『新古今和歌集』における西行歌の入集状況は、西行歌に対しての相当に高い評価を示すもので、その当時の西行歌享受の一端を示すものといえよう。西行に対する憧憬なり崇敬の念について、そして西行歌の享受の在り方については、新古今歌人ということで一括して捉えることは出来ず、個々の歌人によってその程度は異なるし、意識も一様ではない。また、一歌人を捉えてみても、時期による変遷は認められるであろう。だが、『新古今和歌集』という勅撰集に取り込む際の撰者たちの意識ということ、その輪郭を明確にすることは可能であろう。それは『新古今和歌集』の編纂に関わった撰者たち、そして下命者でありかつその撰集作業にも深く関わった後鳥羽院の西行および西行歌の受容、評価の在り方を示すものと理解してよいであろう。いかなる意図的な配慮のもとに西行歌が「集」としての『新古今和歌集』に組み込まれているかを考察することは、西行という歌人の本質を追究する一手段として有効なものと考える。本稿では、後代の歌人たちの西行歌享受の側面を、特殊な内容ではあるが、

『新古今和歌集』の神祇部に配列されている西行歌を考察することで明らかにしてゆきたい。

I

西行という歌人の理解・評価ということに関して、新古今歌人たちに大きな衝撃を与えたものの一つに彼の劇的とも言える死を挙げることが可能である。『拾玉集』（巻第五）の詞書にみられる「文治六年二月十六日未時円位上人臨終などまことにめでたく存生にふるまひおもはれたりしに更にたがはず、世のすゑに有りがたきよしなん申しあひけり、…其後よみおきたりし歌ども思ひつづけて寂蓮入道の許へ申し侍りし」といった言葉や、その贈歌は端的にそのことを示している。

君しるやそのきさらぎといひおきてことばにおへる人の後の世

（五一五八）

風になびくふじのけぶりにたぐひにし人の行へは空にしられて

（五一五九）

ちはやぶる神にたむくるもしほ草かきあつめつつみるぞかなしき

(五一六〇)

「死」という一事を契機にして個人の生前の事蹟が再評価されるということとは考えられることで、右に挙げた慈円の詠歌にも、西行の示寂に接した率直な感懷が認められる。「君しるや」の歌に詠み込まれているように、かねて西行が「願はくは」と詠んだ、その願い通りの死が与えた影響は相当なもので、右の慈円のもの以外にも俊成、定家、良経などの詠歌も存しており、周辺の人々はこの一事をもって西行という歌人の印象をより強烈にしたことは否めない。また、建久元年九月十三日、西行の没後半年を経て九条家で催された『花月百首』の良経歌に認められるような西行追慕の姿勢はやはりその衝撃の大きさを漂わせている。⁽¹⁾

しかし先に挙げた慈円の三首で留意しなければならないことは、それが西行の衝撃的な「死」に触発された詠歌でありながら、五一五九、五一六〇の二首に認められるように、内容的には西行の生涯を見詰めたうえでの感懷であり、その歌人の生涯の中から殊に「風になびく」歌と両宮自歌合という行為を念頭に置いた歌を詠んでいることである。静かに西行の生涯を振り返ったとき、慈円の心にとどまった事柄が右の二つであったことはまことに印象的である。西行自身が「これぞわが第一の自嘆歌」と言ったと伝えられている歌とともに、西行が晩年に編纂した両宮自歌合(『拾玉集』では「又諸社十二巻の歌合太神宮にまゐらせん」という表現になっている。)を強い印象をもって受け止めていたことは、程度の差こそあれ、その当時の人々の意識を代表するものと言えるだろう。

両宮自歌合の編纂の意図については、「西行の両宮自歌合について—編纂の意図を中心に—」⁽²⁾において、両宮自歌合の編纂と伊勢神宮への奉納という行為に込めた西行の意識として和歌伝統の復興とい

うことを読み取ったが、この西行の行為は、ただに西行個人においてのみ理解されるべきものではなく(もちろん、行為その中に既に俊成、定家という他者を介在させてはいるが)、それが当時の中央の歌壇に与えた影響を充分に考えなければならぬし、また一方では、伊勢神宮の神官たちの作歌行為に及ぼした影響の大きさも理解しなければならぬ。

後者に対しての影響は、神宮の神官たちの作歌行為を積極的に推進したこと、そして中央の歌壇に伊勢神宮の存在を注目させたこと、それが神宮の神官たちと中央の歌壇との繋がりをより一層強固なものにしたこと、等の点である。『御裳濯和歌集』の序文には、

ちかくは西行といふものありき、ひごろ山の辺の露になれて、

心柿本の風にかよへり、草のむろを二見浦にしめて、詞の花を内との宮にたむけたてまつる、これをわかちてふたまきとせりと西行の両宮自歌合を特筆し、近き世の功労者としての大きな功績を賞讃している。⁽³⁾伊勢の神官たちの受け止め方は右の如くであるが、これからしても西行の両宮自歌合の及ぼした影響の大きさを推し量ることが出来るよう。

一方、中央の歌壇に与えた影響は、これまでは主に自歌合の流行といったことで捉えられていた。確かに、自歌合形式の先蹤という意義は重要であるが、それとともに、時代思潮として人々に伊勢神宮を強く印象づける契機となった点を見逃してはならないだろう。

新古今時代における伊勢神宮に対する関心の高まりは、これから見てゆく『新古今和歌集』の神祇部におけるその位置付けをもってしても明らかであると思われるが、その伊勢神宮への関心の高まりは、西行の両宮自歌合によってもたらされたところが大きかったのではなからうか。もちろんそのような結果をもたらしたには、それを求

める時代の要請ということを考えなくてはならないが、その一翼を担った存在として西行の両宮自歌合は重要であると思われる。

II

ここで勅撰集における神祇歌の位置と、『新古今和歌集』巻第十九「神祇部」に収載されている六十四首の概要を把握しておきたい。

勅撰集における神祇歌の位置およびその変遷については、臼田甚五郎氏⁽⁴⁾、福井久蔵氏⁽⁵⁾によって概説されている。勅撰集における神祇歌の変遷についてはここでは詳しくは触れないが、例えば神祇歌が初めて一卷の独立した部立として設けられた『千載和歌集』の神祇部と比較するとき、『新古今和歌集』のそれが質量ともに充実したものであり、配列構成も異なった方針のもとに整理されたものであることがわかる。『千載和歌集』巻第二十の神祇部に収められている三十三首の内容を見ると、各神社詠と大嘗会和歌とに大別することができる。その二つに類別されたもののうち後者については、いまだ神祇部に対する内容の規定が流動的であったとはいえ、その本来の性格よりすると賀部に部類されるべきと思われるものが、「集」全体の構成が重視されたためか巻第十の賀部と分割されて載せられている⁽⁶⁾。この一事は「神祇」の内容がいまだ固定していなく可変的であった事を意味しているだろう。

およそ神祇、釈教の二つの部が勅撰集という和歌文芸の中に位置を占めるようになっていったことは、平安時代中期から後期にかけての時代思潮と無関係ではないと思われるが釈教歌が教理經典の内容理解に基づく観想的方面において充実発展していったのに比して、神祇歌の方は、素材的な拡がりもなく、社の清浄さを社頭の景物を

素材として詠み込む手法によって文芸性を加えていった程度で、特記される進展を見ることはなかった。『千載和歌集』では、巻第十九の釈教部が五十四首であるのに対して、巻第二十の神祇部が三十三首である。これはただに数量の上での相違にすぎないが、二十年を経ずして成立した『新古今和歌集』においては、釈教部六十三首に対して神祇部は六十四首と、その位置は逆転している。この経緯については、時代思潮とともに、それぞれの勅撰集の撰集意識の相違も念頭に置かなくてはならないが、ともあれ、『新古今和歌集』に至って、神祇部が数量的にはあれ、内容の深化を示していた釈教部と対等のものとして扱われたことは意義深いことである。

つぎに、『新古今和歌集』巻第十九「神祇部」の構成を見てゆくと、およそ神詠、日本書紀竟宴和歌、そして各神社関係歌に分類することができ、この部に限ったわけではないが細心の配慮をもって配列されていることが知れる。有吉保氏『新古今和歌集の研究基盤と構成』⁽⁸⁾に示された分類では、

(1) 神詠、夢想を中心とする群

(2) その他の歌群

(あ) 日本書紀竟宴和歌群

(い) 各神社を中心とするグループ群

となっており、(1)の神詠、夢想を中心とする群を他の勅撰集との比較において注目すべきものとされている。『明月記』元久二年二月二十二日の条に、「神歌甚多、又神歌之次第尤難測……」と記されているように、託宣とか示現の形で伝えられた神詠が十三首も収められているということは確かに特異なことであって、その収載の順序に関しても難航したさまがうかがえる。そして(2)の(あ)について、日本書紀竟宴和歌が勅撰集に入集されたのは『新古今和歌集』が最

初であつて神祇部の中にあつては内容的に注目すべきもので、「集」に認められる復古主義の思想を色濃く反映したものと云える。

そして次の(2)の(い)であるが、この部分の最初に置かれて
 いる一八八八―一八七〇番歌の賀茂社関係の三首は、配列の意図からすると、「各神社を中心とするグループ群」とは別個のものとして扱ったほうが妥当かもしれない。その後配されている賀茂社関係歌群(一八八八―一八九四)と切り離して扱っていることからしても、単に新旧の歌人によって分けたことも考えられず、祭りを詠んだ歌として捉えることが適当かと思う。この三首は、

かくて神詠を除いては延喜の折の歌を以て始められ、延喜の折の歌を以て終へられてゐる事が知られるのである。神祇部が賀部と共に祈願・祝福の特殊な性格を有する部である事を思ふ時、神詠を除き、延喜の折の歌を以て始められ、延喜の折の歌を以て終へられてゐるこの配列の特殊な相は、その目的が那邊にあったかは自づと明らかであらう。ここでも延喜・天曆の折を政治・文藝の両面から理想とされた後鳥羽院の御意圖を見ることが出来るのであり、その意義は極めて深いものである。⁽¹⁰⁾と指摘されているように、配列構成上、神祇部掉尾に配されている一九一五、一九一六番歌の二首との間により緊密な繋がりを認めることができ、その繋がりで捉えたほうが意義も明確になると思われる。

右のように捉えると、各神社に関係する詠歌が小群をなして意図的に配列されている中で、その最初に位置し、なおかつ最多の十五首を収めている伊勢神宮関係歌がその中では殊に注目されるのであるが、さらに、この「各神社を中心とするグループ群」においても、「又神歌之次第尤難測」といったような「神詠、夢想を中心とする群」

で触れた配列の順序に関する問題が残るのである。「神詠、夢想を中心とする群」の歌順については、『明月記』に「神祇部神次第ヲ立ハ、熊野御列次有其恐、仍春部ヲ為先、四季ニ可立者、神歌事惣依有事恐」(元久二年二月二十六日条)とあり、憚りのある神詠の順序をおおよそは四季の順に従つて決めたことが知られている。その神詠とは内容的にみて多少異なるとはいえ、「各神社を中心とするグループ群」においてもその順序立てに苦慮したことが想像されるのである。「神」に先後の順序を立てるのが困難であるのと同様に、各々が格式と独立した信仰を備えている神社に関係する詠歌を順序立てることもまた難航した作業であつたと思われる。『新古今和歌集』の緻密な配列構成を考えると、この一群のみが意図的な配列をなされていないとも思われず、なんらかの規矩をもつて配列したことは確かである。そこで、煩瑣ではあるが、配列の順序について少しく見ておきたい。配列されている神社名を列挙すると、以下の通りである。

伊勢神宮	一八七一―一八八五
香椎宮	一八八六
石清水八幡宮	一八八七
賀茂神社	一八八八―一八九四
春日神社	一八九五―一八九八
大原野神社	一八九九、一九〇〇
日吉神社	一九〇一―一九〇四
北野神社	一九〇五
*熊野神社	一九〇六―一九一一
白山神社	一九一二
住吉神社	一九一三、(一九一四「住吉と」歌)

註、ここに掲げたものには、先にも触れたように、有吉保氏が(2)の(い)を(ア)から(コ)と細分された中の最初に位置する(ア)の三首(一八六八—一八七〇)と(コ)の二首(一九一五、一九一六)は含めていない。

右に掲げた神社名を見て気付くのは、伊勢神宮をはじめとした大神を中心にして採られていることである。そして、その順序はと言えば、はじめに伊勢神宮が置かれ、以下、賀茂神社、春日神社、日吉神社、住吉神社と並べられている。右に一段高く示した五社は、当時それぞれに尊崇を集めていた大社で、藤原俊成の『五社百首』の奉納社と同一で、部類本としてまとめられている順序と一致する。この神社関係歌群を全体で見した場合、熊野神社を除くと、およそ右のように、先の五社がこの部分の中核として構成されていることが知れる。そしてその大社に関連するものとして、伊勢神宮の後に香椎宮と石清水八幡宮が春日神社の後に大原野神社が、さらに日吉神社には北野神社と白山神社が、付随する形で配列されている。伊勢神宮に付随するものとした香椎宮(一八八七)と石清水八幡宮(一八八九)については、

香椎宮関係の歌はこの一首のみである。しかし、その祭神は天皇・皇后であるので、前の伊勢大神宮関係の作に続いて置かれても不自然ではなく、また次の石清水八幡宮の祭神とは重なりもする。ゆえにここに位置していることは適当と考えられる。⁽¹¹⁾

と指摘されているものが目に止まる。香椎宮は福岡県糟屋郡に鎮座し、仲哀天皇・神功皇后が主祭神で、応神天皇と住吉大神が配祀である。古くは廟と見られたようで、神社として取り扱われたのは円融天皇の御代からであるが、歴代の朝廷の崇敬は篤く、続く石清水八幡宮も、宇佐八幡の託宣によって創建された社で、中世期におい

ては二十二社の第二に位し、伊勢神宮との関係の深さを指摘することができ⁽¹²⁾。そして大原野神社と春日神社とは、京の出社と本社との関係にあり、これを春日神社の小群として一括することは可能である。さらに日吉神社に付随するものとした北野神社と白山神社のうち、北野神社については直接に日吉神社との関係を見出すことは出来ないが、一九〇一から一九〇五の日吉神社関係歌五首の慈円歌の連続によって、また熊野神社の後に配されている白山神社は、延暦寺の管下に置かれていた関係から配されたものと思われる。

ここで問題となるのは、一九〇六—一九一一番歌の熊野神社関係の六首の取り扱いである。この部分の配列構成は内部的にまとまったものを示しており、質量とも十分に独立したものとして扱うことができ、この歌群を日吉神社関係歌群に付随するものとして捉えることは困難である。また、先の五社と相対的に比較して、その位置を定めることは容易ではない。中世期初頭の熊野信仰の実態を考察しなければならぬところであるが、菅見においては熊野関係の歌群と前後の神社の関連を明らかにすることは出来ない。⁽¹³⁾ともあれ、『新古今和歌集』の神祇部に熊野関係歌が六首採られていることは注目すべきことであって、それは院政期末期の熊野詣隆盛の事実や、後鳥羽院自身の篤い信仰などを鮮明に映し出しているものと言える。

以上、「各神社を中心とするグループ群」における大神を中心にした撰歌と配列構成を一瞥したが、

最も注意すべき事柄は、神詠、日本紀竟宴の歌、祭を詠んだ歌、各神社に関する歌と類別され順序立てられた事である。然もその神社に関する歌の最初を伊勢大神宮にあてて、且十五首といふ多くの数を載せてゐる事である。数が多いから最初にのせた

といふのではなく、自覺的に伊勢大神宮を最も重んじたからと見るべきである。從來多く見えてゐた所の住吉に詣でての歌が少い事を考へ合はせると、十五首といふ多數は、やはり、さる崇敬の年の厚重なる所から由來したと考へるのが妥當であらう。⁽⁴⁴⁾

と白田甚五郎氏が言われるように、全体に占める歌の割合やその位置からして伊勢神宮関係の歌群がその中でも一際注目されるのである。『新古今和歌集』に至って、伊勢神宮に關係する詠歌は、俄かに勅撰集の舞台に登場し、そして以後の勅撰集の神祇部にも認められないほど重要な位置を与えられたのであるが、その神祇部六十四首中の十五首を数える伊勢神宮関係歌は、いかなる意識の下に撰び入れられたのであろうか。そのような問題を念頭において、つぎに伊勢神宮に關係する歌群を具体的にみてゆくことにする。

III

大将に侍りける時、勅使にて太神宮にまうでてよみ侍りける

撰政太政大臣

神風やみもすそ河のそのかみよちぎりし事の末をたがふな

(一八七二)

おなじ時、外宮にてよみ侍りける

藤原定家朝臣

ちぎりありてけふみや河のゆふかづらながきよまでもかけて
たのまん

(一八七二)

伊勢神宮関係歌群十五首(一八七一—一八八五)のはじめには右の二首が置かれている。二首は、公卿勅使として伊勢神宮に参向した折の(建久六年二月二十九日出発)良経歌と同じく副将として供

奉した定家の歌で、新古今歌人を代表する良経、定家両名の歌をもつて歌群のはじまりとしていることはまことに印象的である。続いて、公継卿が勅使として大神宮に参詣した時の斎宮女房との贈答歌が並べられている。

公継卿、勅使にて太神宮にまうでて、かへりのぼり侍りける
に、斎宮の女房の中より申しおくりける 読人しらす
うれしさもあはれもいかにこたへまし故郷人に問はれまし
かば

(一八七三)

返し

斎宮権大夫公継

神風やいすずかわ浪かずしらすむべきみよに又かへりこん

(一八七四)

久保田淳氏は右の四首について、「公卿勅使に關係する作品群として緊密な結びつきを示している⁽⁴⁵⁾」と指摘されているが、公卿勅使に關係する作品群ということではむしろ、つぎの

公卿勅使にてかへりはべりけるいちしのむまやにてよみ侍りける
中院入道右大臣

浪
たちかへり又もみまくのほしきかなみもすそ河のせぜのしら

(一八八一)

までを一連のものとして扱ったほうがよいのではないだろうか。右の歌は、勅使として伊勢に参向した後一志郡で大神宮の神威を顧みる内容のものであるが、この雅定歌までが「公卿勅使」を軸にストーリー性をもって展開しているように思われる。つまり、その初めには新古今歌人を代表する良経、定家両名が公卿勅使として参向した折の詠歌を掲げて公の立場で直接に伊勢神宮の神威に接した述懐を示し、ついで、伊勢の地における公卿勅使と斎宮女房との挿話を

挟み、さらに、後鳥羽院、西行、慈円の歌を並べて伊勢神宮に係する詠歌の中核とし、その締め括りに伊勢からの帰途、一志郡で大神宮の神威を顧みる右の雅定歌を配する、といった具合である。

源雅定の公卿勅使の事は、保延二年、天養二年、仁平元年の三度を数え¹⁰、右の一首がどの折のものであるか判然としないが、いずれにしても一首の詠作年代は他の十四首とは相当な隔たりを示している。後藤氏は、伊勢神宮関係歌を「すべて千載群歌人の歌¹¹」と一括されているが、その分類の中でも勅撰集の初出が『金葉和歌集』にまで溯り得るのは源雅定のみであり、当代の作品を並べる伊勢神宮関係歌群にあって右の雅定歌は異質なものと言える。この雅定歌が撰入されたのは、おそらく配列構成上の必要からで、「公卿勅使にてかへりはべりける」という作歌の状況と、「たちかへり又もみまくのほしきかな」という内容の特異さが注目されたためと考えられる。

右にみたように、公卿勅使に関する詠歌は伊勢神宮関係歌の中では重要なモチーフとして扱われている。そのような理解に従うと、それに挟み込まれて配列されている後鳥羽院と西行と慈円の六首は、直接に大神宮の御神に歌いかけたものとして、『新古今和歌集』の伊勢神宮関係歌の中核をなすものとして位置付けられるのである。

太神宮のうたの中に

太上天皇

ながめばや神ちの山に雲きえてゆふべの空を出でむ月かげ

(一八七五)

神風やとよみてぐらになびくしでかけてあふぐといふもかし

こし

(一八七六)

題しらず

西行法師

宮ばしらしたついはねにしきたてて露もくらぬ日のみかげ
かな (一八七七)

神ち山月さやかなるちかひありてあめのしたをばてらすなり
けり (一八七八)

伊勢の月よみのやしろにまゐりて、月をみてよめる

さやかなるわしのたかねの雲るよりかげやはらぐる月よみの
もり (一八七九)

神祇歌とてよみ侍りける

前大僧正慈円

やはらぐる光にあまる影なれやいすがはらの秋のよの月

(一八八〇)

右の六首のうち、後鳥羽院の二首がここに置かれているのは為政者として大神宮に祈念する天皇の立場よりして首肯される。神祇部のなかで後鳥羽院の歌が採られているのはこの伊勢神宮に係する二首と、熊野社関係の三首であり、この状況は後鳥羽院の信仰の在り方をよく反映しているものと思われる。つまり、熊野社関係の詠歌は、院の個人的、私的な信仰を示しており、右の伊勢関係の二首は為政者としての公的な立場を表出しているよう。そして、慈円の一首が後鳥羽院の二首と同様に重要な立場に配置されていることについて、彼の藤原九条家という権門の出自や天台座主としての宗教界における地位などからすれば、それにふさわしい資格を認め得るであらう。

その後鳥羽院、慈円と同等のものとして——もしくはそれ以上の正当性を有して——、西行は伊勢神宮関係歌群の中で重く取り扱われているのである。神祇部に入集している西行歌が右の伊勢神宮関係の三首のみであることなどからしても、新古今の撰者たちや後鳥羽院にとって、西行という歌人は伊勢神宮に深い関わりを持つ歌人とし

て強く意識されていたことは疑いない。少なくともこの神祇部の神社関係歌においては、その神社にふさわしい資格を有しているか否かという、歌人の資格が重視されているのである。春日神社関係歌群の兼実、俊成、慈円然り、日吉神社関係歌群が慈円歌によって占められていること然り、また後鳥羽院の詠歌が伊勢関係歌群と熊野神社関係歌群にのみ見られること然りである。『新古今和歌集』の撰集意識よりすると、西行の三首を他の歌人のものに置き換えることは不可能で、伊勢神宮関係歌群の中核を占める必然性は、むしろ御鳥羽院以上に、西行にあったと思われる。

先の後鳥羽院の二首は、承元二年の内宮三十首（一八七五）と外宮三十首（一八七六）のもので、後鳥羽院自身の意向によって部類期になって追加されたものである。加えて、二首には隠岐本においては除棄されているという経緯があり、それが後鳥羽院周辺の政治状況の推移と密接に関係したものであったことを想像させる。有吉氏はその御鳥羽院の二首を含めた伊勢神宮関係歌群の部類期になったの追加状況を示してつぎのように述べておられる。

新古今集神祇部中の伊勢大神宮関係十五首は、従来の勅撰集において、後拾遺集二首、千載集二首の他にみられないものである。最も新古今的要素の濃いものであることが知られる。後鳥羽院の政治姿勢を考えさせるもので、部類期になったの追加が十五首中の五首（1873、1876、1885）であることが特にその傾向を示しているといえよう。⁽⁴⁾

右の指摘をもとに、追加の五首を除いた『新古今和歌集』成立当時の伊勢神宮関係歌群の配列を考えると、西行歌三首に担わされた意義の大きさはいっそう明確になるであろう。神祇歌中の西行歌三首は、伊勢神宮の威光―それは、後述するように、現実の社会が「聖

代」であることを象徴していたと思われる―を表現するためには欠くことのできないものであった。一八七八番歌一首は隠岐本では除棄されているようであるが、西行の三首は、現実の政治情勢にも左右されることのないものであり、伊勢神宮関係歌群には欠くことのできないものであった、と言えよう。

IV

『新古今和歌集』の為し遂げようとしたことが和歌による「聖代」の構築であったとすれば、そのような撰集意識は、神祇部にも色濃く反映されているはずで、それは先に触れた日本書紀竟宴和歌の撰入や延喜の折の歌をもって配列構成の軸としたことに顕著であり、また皇室との絶対的な繋がりを有する伊勢神宮の関係歌を多く採り入れていることにも顕著である。そして『新古今和歌集』の編纂にはたらいだ意識を考えると、そこにも下命者である後鳥羽院の意向を認めなければならぬであろう。政治と和歌の共存、共栄を自身の理念、理想とした後鳥羽院の姿勢からすると、神祇部の伊勢神宮に関係する詠歌は非常に重要な意義を持つものであったと思われる。その伊勢神宮関係歌群の中に三首の西行歌を配していることは御鳥羽院の歌人西行に対する尊崇の念の現れとみてよいであろう。西行が晩年に企図した伊勢神宮への自歌合奉納という行為は、非常に讃意をもって是認されるものであったと推定され、神祇部伊勢神宮関係歌群の西行歌の位置付けはそのことを物語っているように思われる。そしてこの神祇部における西行歌の入集状況は、『新古今和歌集』という勅撰集の撰集意識が奈辺にあったかをも示すものと思われる。

神祇部中の西行歌は、『新古今和歌集』入集歌九十四首のうちのわずか三首ではあるが、数量が示すもの以上の意義を有しているように思われる。『新古今和歌集』に採られた西行歌の大きな特質が「類型的な草庵・山家生活を背景とした生活抒情歌⁽⁹⁾」であることは疑いのないところで、確かにそのような「草庵の歌人」というイメージは新古今時代の西行像の中核をなすものであったろう。しかしながら『新古今和歌集』に見られるすべての西行歌がそのような西行像を示しているかという点、そうとも言い切れない。これまで見てきたように、神祇部の伊勢神宮関係歌群の西行歌は一見すると右の像とは異なったものを示している。それは和歌世界において「聖代」を具現化し得た最後の歌人といったものである。

先に挙げた西行の三首は、一八七七番歌は『聞書集』に、そして一八七八番歌と一八七九番歌の二首は『御裳濯河歌合』に見られ、実際に伊勢の地にあつて間近く大神宮の威光に接しての率直な感慨を詠んだもので、その神慮によって保たれている「聖代」を表現している。西行が真に彼が生きた現実社会を「聖代」と観じていたか否かという作者の意識は措いて、後鳥羽院をはじめとして新古今の撰者たちが右の西行歌によって示そうとしたものは、かれらが希求するところの「聖代」であつたと思われる。

伊勢関係歌群の西行歌三首が他の歌人の詠歌とは異なつた光彩を放っていることは言うまでもないが、このような歌は、もはや他の歌人では詠出することのできないものではなかつただろうか。それには境涯の違いといったことも原因していたであろうが、大きな要因として世代の相違、生きた時代の相違といったことが考えられる。生活体験、人生体験において充実する時間を有していない新古今歌人たちにとっての西行は、(ある時期をともに過ごし、直接または間

接にであれ、生前の在り様を感知し得た)「近き世」の歌人ではあつたのだが、意識の上ではすでに近寄り難い歌人で、かれらが憧憬する「古典」の世界の存在として捉えられていたのではないだろうか。時代は下るが、しばしば引かれる『後鳥羽院御口伝』の評言にもそのような意識を読み取ることは可能である。

西行は、おもしろくて、しかも心も殊に深く、ありがたくいできがたき方も共に相兼ねて見ゆ。生得の歌人とおぼゆ。おぼろげの人、まねびなどすべき歌にあらず。不可説の上手なり。

右の言は、ただに作歌の方法や詠出された歌の批評にとどまるものではなく、歌人西行の存在全体に亘つてのものであるだろう。後鳥羽院は、西行のことを「生得の歌人」、「不可説の上手」と言い切つて、批評を超えたところの存在としてかれを祭り上げてしまふのである。右のようなある意味で觀念化、偶像化の方向を示す西行に対する評価の姿勢⁽¹⁰⁾は、はやく『新古今和歌集』成立の時点においても認められるであろう。『新古今和歌集』に取り込まれる時点において、すでに実態の上にさまざまなイメージが付加された西行像というものが存しており、またそれにもとづいた西行歌の享受も行われていたように思われるのである。以上のことを本稿の問題に即して言えば、後鳥羽院、もしくは新古今撰者たちは、自身が憧憬し、希求するものを表現するために西行歌を摂取した、ということになろうか。そして伊勢神宮関係歌群の西行歌については、自身が憧憬し、希求する「聖代」を、西行という和歌伝統の復興を切望した歌人が残した歌に託して表現したという意識構造を付言しておきたい。

おわりに

従前の新古今ならびに西行の研究において閑却されていた『新古今和歌集』神祇部に収められている西行歌三首の意義を、西行晩年の両宮自歌合の意義に関連させて述べようとしたために、迂路を辿ってしまった。如上の考察によって提示した西行歌享受の姿勢が後鳥羽院のみのものであるのか、あるいは更に更に範囲を拡げ得るものであるのか、その辺りのことを明確に指摘することのできなかったことを自省し、今後の課題としたい。

註

- (1) 稲田利徳氏「西行と良経」(『中世文学研究』13、昭和62年12月。)は、この『花月百首』をはじめ、西行歌が投影する良経歌を摘出して考察されている。
- (2) 拙稿(上田女子短期大学紀要第十二号、平成元年三月。)参照。
- (3) 奥野純一氏『伊勢神宮神官連歌の研究』(昭和50年、日本学術振興会。)、第一章「連歌以前」参照。
- (4) 『神道と文学』(昭和16年、白帝社。)に収載の「神詠の文芸性」、「神祇歌の流れ」。
- (5) 『和歌連歌俳諧の研究』(昭和18年、山一書房。)に収載の「神祇和歌の考察」。
- (6) 大嘗会和歌といっても風俗歌と屏風歌の二種があり、その区分に従って配列されたことが指摘されている。有吉保氏編『千載和歌集の基礎的研究』(昭和51年、笠間書院。)二七六頁参照。
- (7) 有吉氏前掲書(6)、二七三頁参照。
- (8) 『新古今和歌集の研究 基盤と構成』(昭和43年、三省堂。)、五〇三頁。
- (9) 後藤重郎氏『新古今和歌集の基礎的研究』(昭和43年、塙書房。)、第

六章第二節、3参照。

同氏「新古今集神祇部日本書紀竟宴和歌に関する一考察」(『名古屋大学国語国文学』第十四号、昭和39年4月。)に詳論されている。

(10) 後藤氏前掲書(9)、三二六頁。

(11) 久保田淳氏『新古今和歌集全評釈』(昭和52年、講談社。)、第八巻、一八八七番歌の「鑑賞」、三八〇頁。

(12) 「東大寺縁起」などには、伊勢神宮と八幡宮と東大寺の三者の密接な関係が記されている。

(13) 熊野信仰の全体を見渡した見解を示すことはできないが、その一面として天台的発想も強く認め得る。村山修一氏『本地垂迹』(昭和49年、吉川弘文館。)、一五八ページ参照。

(14) 白田氏前掲書(4)、九八頁。

(15) 久保田氏前掲書(11)、第八巻、三四九頁。

(16) 「二所太神官例文」、「伊勢神宮公卿勅使雜例」参照。

(17) 後藤氏前掲書(9)、三二五頁。

(18) 有吉氏前掲書(8)、五〇八頁。

(19) 藤平春男氏「二つの態度——俊成・定家と西行——」(『国語と国文学』、昭和44年9月。)、二六頁。

(20) 伊勢神宮の神威や、それによって保たれる「聖代」といったものを西行がどの程度確信していたかは判然としないが、私見を述べるならば、そうあるはずだと信じようとした、または、そうあってほしいと切望した、というようなものではなかっただろうか。

(21) 川平ひとし氏『新古今和歌集——和歌と政治』(『国文学』第32巻5号、昭和62年4月。)、は、『後鳥羽院御口伝』の慈円評の中の「大僧正は、おはやう西行がふりなり」(傍点、川平氏。)という言説を引き、「西行風」が院や新古今人らにとって直ちに輪郭や感触を想起しうるものとして理解されていたことを知りうる」と述べ、「西行が生を託して作り上げた表現の時空も新古今人らにとっては一つの表現様式で

あつた」と指摘されている。

※和歌、詞書の引用はすべて『新編国歌大観』（角川書店）によった。
また、『後鳥羽院御口伝』は日本古典文学大系（岩波書店）の『歌論
集能楽論集』所収の本文を用い、『明月記』は国書刊行会発行の本文
を用いた。